

『我身にたどる姫君』の年齢表現

— 付 年齢・官位・身分一覧 —

田 坂 憲 二

一

全八巻、七代四十五年間に亘る物語である『我身にたどる姫君』は、極めて整然とした編年的構造を有しており、その時間構造が作者によっていかに厳密に構成されているかを筆者は以前に指摘したことがある。^{注①}

本稿では、更に、本物語に於いて特徴的な記述方法を有していると思われる登場人物の年齢表記の面から、この物語の時間構造について考察を加えてみたい。

元来、登場人物の年齢表記は、物語内の時間の経過を示す「年返りぬ」「明くる年の秋」「八月十五夜」等々の編年的記述と表裏一体となって、物語の時間を形成しているものである。換言すれば、登場人物の年齢の累積が物語の時間形成に重要な役割を担っているものであり、従って、その

年齢表現を追うことは、この物語の時間構造をより鮮明に浮び上がらせることとなるであろう。

又、この物語に見られる年齢表記のいくつかの特徴的傾向は、先行の物語との関連においても注目すべきものがあると思われる。

年齢表現の側面から『我身にたどる姫君』に検討を加える所以である。

二

先ず、この物語において登場人物の年齢が直接的・間接的に示されている部分を列記してみよう。

- (1) 我身姫「十といひし事もわづかに四年・五年の間近さなれば」^{注②}（I・一・46、物語一年）

- (2) 関白^{注③}〔6〕、女三宮〔10〕「殿はおとなびたまひにたれど、四

十にまだ二つは足りたまはず、この宮二十にまだしきほどの御あはひ」(Ⅲ・一一・152、物語三年)

(3) 悲恋帝、今上「帝は十一、春宮十にぞならせたまふ」

(Ⅴ・一五・124、物語三十三年)

(4) 女帝「上は、十六にて春宮に参らせたまひて、やがてその年、御国譲ありて后に立たせたまひて、二十一にて御位につかせたまひしかば、今年二十七にぞおはします」(Ⅴ・一五・124、物語三十三年)

(5) 皇太后²⁰「先帝に二つばかりおとりきこえさせたまへるにや」(Ⅶ・五・49、物語三十四年)

(6) 左大臣¹⁵、右大臣¹⁶「(右大臣ノ)御歳、左の大臣にはひとつおとりたまへれば、二十九にやものしたまふらむ。これは先帝の御おなじ歳なるべし」(Ⅶ・六・54、物語三十四年)

(7) 右大臣¹⁶「三十に多く余りてぞ、言ひしらず思ひの外なる御傍ら臥し出できにける」(Ⅷ・六・188、物語四十年前後^{注④})

(8) 春宮²⁹「十ばかりにならせたまひぬ」(Ⅷ・七・193、物語四十三年)

(9) 三条院、藤壺太皇太后宮²¹、後涼殿皇后宮¹⁷「院の上、太皇太后宮、皇后宮、みな四十に満たせたまふべき歳は、御賀の事などかねてののしりしかど」(Ⅷ・七・194、物語四十三年)

以上九例がこの物語の年齢表記の全てである。

さて、これらの記述を見て、先ず第一に注目すべきことは、題号の由来となっている我身姫の問題である。我身姫は物語中最も長期に亘って描出され、その死後まもなくこの物語も語り終えられており、一見物語の主人公のような存在であるが、その年齢は巻頭近くで記されるだけで、以後全く記されない。他の登場人物との年齢の比較も行われず、物語を律する時間とは無縁な存在なのである。この物語の年立を作製する際には、全編に亘って登場する唯一の人物であるため、その年齢は物語年の一種の指標として併記されるが、実は、我身姫の年齢と物語の内的時間の連関性は全く皆無なのである。このことは、全編を通ずる主人公の設定が行われないという鎌倉物語の特質^{注⑥}をもっとも如実に裏付けるものであるといえよう。

これに対して、物語内の時間を規定する役割を担っているのは三条院・藤壺太皇太后宮・後涼殿皇后宮の三名であり、彼らの年齢によって物語内の空白の時間が明らかにされ、物語全体の時間が確認できる仕組みになっている。但し、彼らの年齢を基準にできるのは、その誕生以後、物語の後編(巻四ノ八)に限定されるのは言うまでもない。

又、女帝の年齢が皇太后・左大臣・右大臣等の他の登場人物の年齢算出の基準となっているのも見逃すことはできない。これは、例えば源氏物語では葵上の年齢が源氏との

比較において、柏木のそれが夕霧との比較において記されているのと同じ方法である。

従って、源氏物語正編における光源氏のように、(一)全編に亘って登場し物語全体の時間の指標となりえ、(二)その年齢表記によって語られていない物語の空白の時間も逆に算出でき、(三)他の登場人物の年齢をも対比的に導き出せる、統一された一個の人間像としての存在は、この物語の中には見出しがたい。代ってその役割は、(一)我身姫 (二)三条院・藤壺太皇太后宮・後涼殿皇后宮 (三)女帝 の三組五名の人物に分散継承されているのであり、物語を貫く主人公の不在は、この年齢表現の上からも明白に看取できるのである。

以下、年齢表記に見られる特質を具体的に検討してみよう。

三

先ず第一に、この物語における年齢表記は、単に登場人物の年齢を明らかにすることだけを目的として記されたのではないことを確認しておきたい。それは、ある場面において、その人物の年齢を明らかにした方が何らかの意味で表現効果を上げられる、そのような時に限ってなされるのである。

第(1)項の我身姫の年齢を表記する場合は、我身姫の年齢

を示すことによって、関白⑥と皇后宮⑤の逢瀬が一体何時頃のことであったのか、ということが明らかにするのである。この物語は、我身姫十四、五歳の時点から語り始められており、それ以前の関白・皇后宮・中宮⑧・水尾帝⑦に関する過去の事蹟については、巻一第五・七節で述べられている。姫君十四、五歳という年齢を記述することで、そこに語られている出来事が物語の内的時間に束縛されない漠然とした昔のことではなく、現在(巻一の段階)から明確な時間の溯行によって捉えることのできる過去のものとして位置づけられるのである。即ち、我身姫の年齢表記によって、これら過去の様々な出来事も物語の内的時間の中に組み込むことが可能となるのである。

次の第(2)項、関白⑥と女三宮⑩の年齢表記はどうであろうか。この場合も年齢表記を必要とした明白な理由が存する。女三宮の関白への降嫁が、源氏物語若菜上巻の女三宮の源氏への降嫁を模したものであることは既に指摘されている。^{注⑥}源氏・女三宮の年齢はそれぞれ四十歳・十四、五歳であったが、この物語の関白・女三宮の場合も、年齢を明らかにすることで若菜上巻を読者にはつきりと意識させようとする明確な意図が読みとれるのである。関白と女三宮の年齢には相当の開きがありそうだという漠然としたイメージではなくて、三十八歳・十八、九歳という具体的な数値を提示することによって鮮烈な印象を与えることができる。

よう。「殿はおとなびたまひにたれど、四十にまだ二つは足りたまはず」という表現は、或いは若菜上巻の源氏四十歳という記述を直接想起させる意識をそこにみるべきであるかもしれない。

次に第(4)項、卷五巻末の女帝の年齢表記について見てみよう。女帝は、この物語の歴代の帝の中でも聖帝・明王として謳われ、「雨風の音・月星の光まで、あまりまことしからぬまで、世に見ならはぬさまにのみ治まり静かなる御代」(V・一・15)「さきざきの御代よりも、限りある宮仕へなどは、我はとうちゆるび事そぐべくもあらぬものから、男も女も、あまたつらねて物をも言ひかはし、戯れをもするならで、ひとりまにうちささめきなどするならひもなくなり」(V・一・18)と、その名君ぶりは物語の随所に記されている。この女帝譲位の後に上掲の年齢に関する記述があり、更にその直後、女帝は崩御するのである。

この女帝にみられる年齢表記の方法は帝皇日継や歴史物語の本紀の表記と通じるものがある。例えば『大鏡』の朱雀天皇の条は以下の如く記されている。

このみかど、延長元年癸未七月廿四日むまれさせ給。

同三年十月廿一日、東宮にたゝせ給、御年三歳。同八年

庚寅八月廿二日、くらゐにつかせたまふ、御年八歳。

承平七年正月四日、御元服、御年十五。よをたもたせ

給事、十六年なり。^{注⑥}

女帝は東宮位を経していないため、替って東宮参りの歳が示され、次いで即位・譲位の歳が記されている。聖君女帝の譲位・崩御を語る部分であるからこそ、あえてかかる帝紀のような厳粛な記述方法を模したのではあるまいか。帝紀を想起させるような改った表現こそが、明王女帝の最晩年の記載には最も相応しいものであったのである。

猶、女帝の年齢表記の直前にみられる第(3)項、悲恋帝・春宮の年齢も、帝紀スタイルの筆法の一環として捉えるべきであろう。

第(5)項、皇太后の年齢表記は前述の関白・女三宮の場合と類似の性格をもつ。皇太后は、甥に当る悲恋帝の恋慕の対象となり、断食自殺という悲劇的な死を迎えるのであるが、この恋愛事件は、悲恋帝の常軌を逸した一方的行為によってもたらされたものである。入内してきた右大臣の女御には目もくれず、年上の叔母に恋情を寄せるといふこの話の骨組み自体からもそれは明らかであるが、悲恋帝の狂気じみた感情をより鮮明に浮き彫りにするために皇太后の年齢が明らかにされたと考えるとよからう。即ち、十二歳の悲恋帝の恋慕の対象が、二十七歳の^{注⑦}、十五歳年長の女性であることを明示することが必要であったのである。

続いて第(6)項の右大臣の年齢が示される部分であるが、この場合は、一方では次節で述べるように左・右大臣という形で政界の重鎮となったために、年齢を明らかにする必要

があつたと思われる。又、他方では、この年齢表記の直後に、右大臣が相変らず後涼殿中宮を想って独り身を通してゐることが描かれてゐることと関連する。つまり、中宮への恋慕が三十近くになつた今日でも続いているということ、を強く印象づけるためのものである。右大臣のこの年齢表記は、第(7)項「三十に多く余りて」ようやく北の方を迎えた、という巻八の記述とも巧みに呼応するものといえよう。

次に記される第(8)項、春宮²⁹の年齢表現は、これによつて巻八の中に存在する数年の空白期間の年数を算出することが可能となる。即ち、春宮三歳という記載を最後に、物語内での年数の経過は不明瞭となるのであるが、次にこの「十ばかりにならせたまひぬ」という春宮の年齢が記されることにより、この間が七年間であることが明らかになるのである。

最後に第(9)項、三条院・藤壺太皇太后宮・後涼殿皇后宮の年齢表記であるが、これには、巻三と巻四の間に含まれる空白期間を十七年間と規定し、物語内の時間を決定するという大きな役割が窺える。その意味では前の第(8)項と類似する性格のものといえよう。但し、その果たした役割は極めて重要であるため、第五節で改めて論じることとする。

四

この物語の年齢表記の特質の二としてあげられるのは、

登場人物の年齢の示される時期が、その人物の晩年、もしくはかなり長期間物語内で活躍した後のことが多く、物語に登場する際に年齢を紹介されたり、早い段階で明らかにされるようなことは殆どない、ということである。

先ず、第(2)項の関白⁶・女三宮¹⁰は、巻一から物語の舞台に登場しているが、その年齢が示されるのは巻三の半ば、女三宮が関白に降嫁する時点である。この降嫁から数か月間の叙述の後、巻三は閉じられ、次の巻四との間には約十七年間の空白期間が設定されている。この間に関白は薨去し、物語から姿を消す。一方女三宮は入道宮として巻四以降も引続き登場するが、もはや背景的人物であり物語の主題とは無縁となつてゐる。

第(3)項の悲恋帝・今上は、共に帝・春宮として即位・立坊した段階で年齢が示されている。晩年における年齢表示とはいえないが、これはこの両名の誕生が物語中で語られているため、その年齢の算出は容易であり、他の人物達のように何らかの効果をねらつてある段階まで年齢を伏せておくことができないためである。従つて即位・立坊という節目でその年齢を確認するという形になる。第(8)項春宮²⁹の場合も同様である。

第(4)項の女帝²²は、巻四巻頭近く、物語二十二年から登場しているが、その年齢が語られるのは、十一年後の巻五巻末近くにおいてである。女帝は、承香殿女御として入内

(巻四53頁)以来、一貫して物語の中心に位置してきた人物であり、特に巻四巻末で即位してからは物語の一つの主題を担っているのであるが、その年齢は十一年の間明らかになれない。そして物語三十三年に至り、退位の際に初めて二十七歳^{注⑥}というその年齢が示されるとともに、入内が十五歳、即位が二十一歳と、過去に溯ってその時々々の年齢までも記しているのである。しかもこれらの年齢記載の直後、即ち譲位後程なく女帝は崩御するのである。この場合などは、明らかに最晩年に年齢表記がなされている例といえよう。

第(5)項の皇太后宮も又、女帝同様巻四巻頭近くから登場する。女帝ほど物語の主題を直接的に担うことはないものの、巻四・五と一貫して宮の右大臣の憧憬の対象であり、そのことに関する描写も多い。然るに、その年齢が明らかにされるのは、巻七、物語三十四年においてであり、初出から十二年後のことである。しかもこの翌々年には、悲恋帝に忍ばれたのを厭い、自ら死を選んでいる。皇太后の場合も又、晩年に年齢が表記される範疇にいてよいであろう。

第(6)(7)項の殿の左大臣・宮の右大臣の兩人は、巻四以後巻八大尾まで一貫して物語の舞台に登っている人物である。物語内の時間で示せば物語二十二年から四十五年に及ぶ。この両者の年齢が示されるのは巻七・物語三十四年である

から、晩年とはいえない。しかし、殿の中将・宮の中将与並び称せられ、宰相兼右大将与権中納言時代、左・右大將時代を経て、両者の官位はこの左・右大臣で一応の到達点に達した感がある。(左大臣は巻八で内覧の宣旨を蒙るが、父関白の死後も関白職や太政大臣の位には就いていない。)従って官職の点から言えば、両者の年齢表記は一応昇りつめた段階でなされているわけであり、他の人物が晩年において年齢を明らかにされることと一脈通ずるものがあるようである。又、右大臣はこの直後に後涼殿中宮^四と逢瀬を持つが、これを最後に左・右大臣は共に恋の当事者という役割を終え、主役は次世代の悲恋帝や今上・春宮・初草姫君・忍草姫君等に移ることとなる。換言すれば、年齢を表記された時点は左・右両大臣の恋愛人としての晩年をも示すものと言うことができよう。

第(9)項の三条院・藤壺太皇太后宮・後涼殿皇后宮は揃って巻四巻頭から物語の中核に位置しており、その重要性は左・右大臣以上のものがあるといえよう。これら三名の年齢も巻八大尾近くまで明らかにされず、物語四十三年に至って初めて記される。そして三条院は翌年崩御、後涼殿皇后宮もその翌年落飾している。

此様に登場人物の多くが晩年に至って年齢を明らかにされるのに対して、第(1)項の我身姫だけが登場早々に年齢が記されている。これは前節で述べたように、物語の始まる

以前の過去の出来事をも物語の内的時間の枠内に位置づけるために不可欠のものであったからである。

叙上のように、この物語において登場人物の年齢が示される場合は、その殆どが一定期間、多くは十年以上、物語内で描出された後にやっと明らかにされるといふ形をとっている。これは、物語作者が当初からこの物語の時間構造を綿密に計画し、常に的確に把握していたことを裏付けるものではないだろうか。何故ならば、この物語のように、「年返りぬ」という記述や、連続する季節・月日の描写で途切れなく歳月が紡がれている場合、記された年齢から逆に物語内の過去の時点における年齢を容易にさぐり出せるからである。従って、物語内の時間構造が曖昧なものであれば、時間的矛盾が極めて露見しやすくなる。この危険性は、人物の登場の初期の段階で年齢を示す方法に比して数倍数十倍のものがあろう。然るにこの物語においては、女帝の年齢の数え方に一二年のケアレミスがあるのみで、他はほぼ完璧なまでに保たれている。具体例を一、二あげてみる。

卷三卷末で我身姫・女三宮^⑩・女四宮^⑪の懐妊が語られるが、この時点で尚侍^④はまだ懐妊しておらず、又、二宮^④は北の方も得ていない。よって彼らの子供である三条院・後涼殿皇后宮・藤壺太皇太后宮は、女帝や宮の右大臣より年上でなければならぬ。この五人の年齢が明示される

箇所は、三条院等が卷八物語四十三年（四十歳）、女帝が卷五物語三十三年（二十七歳）、宮の右大臣が卷七物語三十四年（二十九歳）と物語内の時間でも巻でも大きく隔っている。そして更にどの人物も物語内に描出され始めて十〜二十年を経ているにも拘らず、その統一性は厳然と保たれているのである。又、三条院・皇太后兄妹の年齢も、物語三十四年（卷七）、物語四十三年（卷八）に分散表記されているが、兄妹の年齢が逆転するようなことはない。藤壺太皇太后宮・左大臣姉弟の場合も同様である。（猶、本稿付載の年齢・官位・身分一覧を参照されたい。）

この物語の作者は、個々の人物の年齢を当初より一定の見通しをもって設定しておいたからこそ、登場人物の晩年の段階でそれを記しているにも拘らず、人物相互の年齢矛盾は全く起っていないのである。物語の時間構造・人物の年齢把握が厳密なものであったが故に、敢えて人物登場の初期の段階で年齢を示すというような初歩的な安全な方法に頼る必要がなかったのであり、そこにはこの物語作者の一種の自負のようなものさえ窺えるようである。

猶、主要人物の年齢が晩年の段階で記され、しかも物語内で年齢操作に極めて強い統一性があるものとしては、既に源氏物語の例があり、或いはこの物語作者は源氏物語のそれを意図的に用いているのかもしれない。

五

次に、巻八において明らかにされる三条院・藤壺太皇太后宮・後涼殿皇后宮の年齢表記の問題について考えてみたい。

この三者の母親はそれぞれ我身姫・女四宮^⑫・女三宮^⑩であり、巻三巻末はこの女性達の懐妊の記述で閉じられていた。女三宮の子供は後涼殿皇后宮一人であり、三条院は我身姫の長男(妹に皇太后・女二宮がいる)ということ、巻三巻末にその出生が示唆された子等であることは明白であるが、女四宮腹には、右大臣・藤壺太皇太后宮の二人の子供がおり、その長幼について物語中では一切語られていないため、巻八の時点までどちらが三条院・後涼殿皇后宮と同年齢であるのか不明である。

又、巻四は巻三巻末から相当長期間を経た時点から筆が起こされているが、そこでは当初から物語で重要な位置を占めている三条院(当時は春宮)や藤壺太皇太后宮(当時は関白姫君)が何歳であるのか——即ち巻三と巻四との間にどれ程の歳月が経過しているのか——ということは全く語られない。そしてこの巻八の段階で三人の年齢が示されるに及んでようやく、その期間が十七年間であり、女四宮が他の二人と同年に生んだ子が藤壺太皇太后宮であったことが明らかになるのである。この構成の巧みさ、とりわけ十

七年間という空白期間を大尾近くで明らかにする手腕については既に指摘もあり、又、筆者もかつて詳述したことがあるので^{注⑩}繰り返さない。が、ここで指摘しておきたいのは源氏物語藤裏葉巻との関連の問題である。

巻八において三条院・藤壺太皇太后宮・後涼殿皇后宮の四十の賀の準備などで早くから世間で大騒ぎであったという形で、この年三人が揃って四十歳であることが示されるが、これは藤裏葉巻で、明年源氏が四十歳であり、世の中をあげてその準備をしているという記述を踏まえたものであろう。

院の上、太皇太后宮、皇后宮、みな四十に満たせたまふべき歳は、御賀の事なかねてののしりしかど(Ⅷ・七・194)

明けむ年四十になりたまふ。御賀の事を朝廷よりはじめたてまつりて、大きな世のいそぎなり(藤裏葉、^{注⑩}四四五)

従来、この両者の関係について指摘したものはないが、明らかに『我身にたどる姫君』は藤裏葉巻の記述を下敷きにしているといえよう。言うまでもなく藤裏葉巻は源氏物語第一部の最終巻であり、源氏の四十の賀の準備という目出度い雰囲気の中で物語に一応の終止符を打とうとしているのである。一方、『我身にたどる姫君』の方も後編の巻四以来一貫して主要人物であった三人の四十の賀で物語の閉

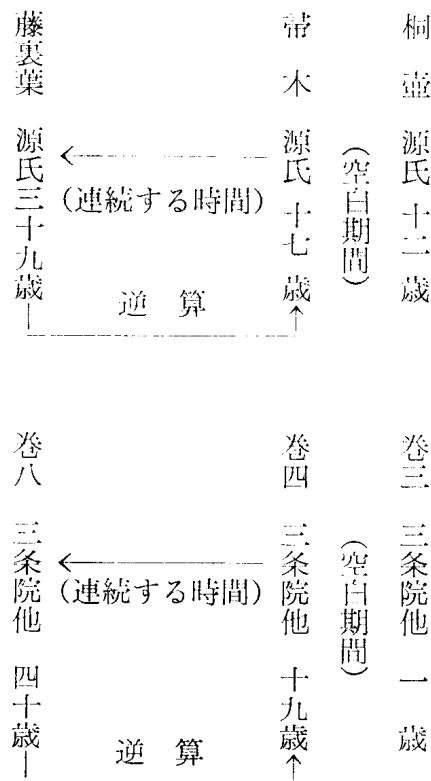
じめを飾ろうとしているのである。尤も我身姫の死によって四十賀の記事は描かれないのだが。ともあれ、主要人物の四十の賀をもって物語の大尾を締めくくろうとする構成は、明らかに藤裏葉巻にならったものといってよからう。

しかも『我身にたどる姫君』の場合は、単なる形式の模倣だけに留まらず、より本質的なものまでも吸収しているように思われる。

源氏物語において光源氏の年齢は、桐壺巻で誕生より十二歳に至るまで記された後、帚木巻では桐壺巻から数年の隔りを置いて書き始められているが、その間に経過した歲月については記されていない。しかも、帚木巻以降藤裏葉巻まで光源氏の年齢は一切記されず、第一部最終巻である藤裏葉巻に至って源氏三十九歳（明年四十歳）という年齢が明らかにされる。そしてこの時を起点として遡ることによって帚木・藤裏葉巻に至る源氏の年齢が逆に算出され、ひいては帚木巻頭・源氏十七歳^{注④}、桐壺巻との空白期間は四年間との数値を得ることが可能になるのである。即ち、源氏物語の年立において使用される源氏何歳という物差しは、実は藤裏葉巻の記述から逆算したものなのである。

一方『我身にたどる姫君』においても源氏物語と全く同じ過程を辿って物語内の時間が把握できるようになっているのである。つまり、巻八物語四十三年の段階で、三条院等三人の年齢を示すのを起点として、時間を継続的に知る

ことのできる巻四巻頭まで遡り、更に巻三と巻四の間の空白期間が算出できる仕組みになっている。源氏物語・我身にたどる姫君の時間算出の方法を図示すると次のようになる。



即ち、この物語はその時間・年齢表記から考えて、源氏物語の長編構造の本質を最も的確に継承していると見做すべきなのである。

ところで、藤裏葉巻の源氏の年齢を起点としてそれ以前を算出する今日のような年立を作成したのは、一条兼良（1402—1481）をもって嚆矢とされるが、早く『奥入』の記述などにも年立意識の芽ばえを見ることができ、^{注⑤}それらを最初にはほぼ完全な形に纏め上げたのが兼良ということになる。一方『我身にたどる姫君』は巻四迄の歌が『風葉和歌

集』(127)に採られているため、この頃から余り隔らぬ頃に成立したと思われる。従って、兼良の段階より二百年近くも早く、この物語の作者の脳裏には大まかな源氏物語の年立的把握がなされているのであり、源氏物語享受史上でも注目すべきことであるといえよう。

前節で述べた、登場人物の年齢を晩年に至って表記する手法と併せて、作者は源氏物語の長編構造・時間構造の機微を最も的確に把握し、最も正当に継承していると思われる。

六

『我身にたどる姫君』のように、「年返りぬ」などの編年的記述を頻用し、経過する時の流れを丁寧に追い続ける作品は、鎌倉時代の物語の一つの主流をなしているとされる。^{注16}しかし、『あまのかるも』や『苔の衣』^{注17}のようにそれらの作品の多くが登場人物の年齢を事細かに表記するのに比べ、本物語では僅か九箇所と極めて少ない。が、この九箇所の記述によって主要人物十一名の年齢が明瞭となり、更には物語内でその誕生が描かれている六名の年齢も把握可能である。このことは、他の類似の鎌倉時代の物語の中で本作品が際立って正確な時間構造を有していることと関連があると思われる。即ち、作者の物語の長編構想の計画なり把握なりが厳密であればこそ、最少限の年齢表記です

ませることができたのである。「年返りぬ」方式の綿密な編年の記述が一方にある以上、過剰の年齢表記は、些細な年数の計算違いでさえ明らかな矛盾としてその姿を露呈するであろうし、何よりも煩瑣な叙述になってしまうであろう。綿密な編年の記述と、最少限の年齢表記、この二つが噛合った所にこの物語の巧みな時間構造が成り立っているのである。

年齢表現に関して今一つ見逃せないのは、源氏物語との関係である。この物語も平安末期以降の物語作品の例に漏れず、多種多様な面で源氏物語に範を仰いでいるが、それは人物造型や場面性・話型等のような単なる表面的なもの借用にとどまてはいない。登場人物の年齢を後年まで明らかにすることを控えたり、物語末尾近くに示される主要人物の年齢から溯って、物語の時間が把握できる構造など、表面的な理解では成し得ない技法であるといえよう。この物語の時間構造は、源氏物語のそれを最も本質的に受け継いでいると思われる。

叙上のごとく、年齢表現という側面から窺い得たこの物語の時間構造は、鎌倉時代の物語の中でも極めて高い水準を示していることが確認できるのである。

注

- ① 拙稿「『我身にたどる姫君』の時間構造」(『香椎潟』29号、昭和58・10)
- ② 引用本文は、桜楓社版『我身にたどる姫君』(全七冊、昭和58)に依り、巻数・段数・頁数を併記する。
- ③ 登場人物には必要に応じて、注②書所載系図における通し番号を付す。
- ④ 厳密に言えば、物語三十七年～四十二年の間に位置するものである。
- ⑤ 市古貞次氏「中世物語の展開」(岩波講座『日本文学史』昭和34。『中世小説とその周辺』昭和56、所収)
- ⑥ 徳満澄雄氏『我身にたどる姫君物語全註解』(昭和55)、注②書、など。
- ⑦ 岩波・日本古典文学大系『大鏡』47頁。
- ⑧ 同巻・同年に、右大臣二十九歳とある記述を基準にすると二十七歳、女帝より二歳年下との記述を基準にすると二十五歳となり、二歳のズレは出てくる。
- ⑨ 年立上は二十六歳である。作者の計算違いであろう。
- ⑩ 注⑨参照。又、右大臣の年齢(第(6)項)も女帝と同年ならば二十七歳である。
- ⑪ 源氏物語に関しては、大朝雄二氏の詳細な論考がある。(『源氏物語正篇の研究』第六章「人物の年齢をめぐって」(昭和50)
- ⑫ 注②書、注①拙稿。
- ⑬ 引用本文は、小学館・日本古典文学全集に依り、頁数を示す。
- ⑭ 現行の年立に依る。旧年立の計算では十六歳になる。
- ⑮ 『奥入』には、「横笛 柏木の後年也」「鈴虫 横笛同年夏秋也」などの記述が見られる。
- ⑯ 注⑤論文。

⑰ 『苔の衣』が年齢表記を頻用し、その一方で、本文記述との間に大幅な内部矛盾をきたしていることは既に指摘がある。(今井源衛先生「苔の衣について―物語の解体―」『日本文学』昭和29・10)

年 齢・官 位・身 分 一 覧

凡 例

- 一、本表は、登場人物の物語内各年における年齢が一覧出来るように作成したものである。
- 一、見出しの人物名は、原則として最終官職・呼称を用いた。
- 一、年齢は洋数字で示し、直接・間接に本文中に年齢が記されている場合は、ゴシック体を用いた。
- 一、各年の官職・呼称・事蹟等は重要なもののみを示した。
- 一、本文中に誕生・年齢表記等がなされていない人物も、推測によってその年齢がある程度限定される場合は（ ）に開んで示した。猶、根拠については補注を参照されたい。
- 一、人物の年齢が推定によるものは年毎には記さず、必要に応じた最小限の記載に留めた。
- 一、当該人物の死亡の後には、△印で記した。

補 注

- 一、我身姫の年齢は「十といひし事も、わづかに四年・五年の間近さなれば」(Ⅰ・二・46)の記述に依り、物語一年を十五歳とする。
- 二、入道宮は、物語三年の「この宮二十にまだしきほどの御あはひ」(Ⅲ・二・152)の記述に依り、同年を十九歳とする。
- 三、嵯峨院・式部卿宮・入道宮は同母の兄妹であるから、それぞれ入道宮より一歳以上年上である。
- 四、入道宮(女三宮)は、女四宮より一歳以上年上である。
- 五、関白宮は、式部卿宮とほぼ同年代と思われる。
- 六、女帝の年齢は、十六歳東宮参り、二十一歳即位との本文の記述に依り算出する。従って、讓位二十七歳との記述とは一歳のズレが生じる。
- 七、皇太后の年齢は、女帝より二歳年下との記述により算出する。
- 八、女二宮は、同母姉の皇太后よりも一歳以上年下である。
- 九、右大臣の年齢は、女帝と同年との記述により算出する。従って、三十四年の二十九歳との記述とは二歳のズレが生じる。
- 十、麗景殿女御は、父宮が物語四年の段階まで独り身であるので、五年以降の誕生となる。右大臣の妹(Ⅳ・三・26)とするならば、年齢は更に引き下げられる。

人物 物語年	水尾院	皇后宮	水尾女院	閑白	嵯峨院	嵯峨女院	女帝	式部卿宮	右大臣	麗景殿女御	女一宮	忍草姫君	入道宮	後深殿中宮	初草姫君	我身院	我身姫	三条院	皇太后	女二宮	閑白	女四宮	左大臣	藤壺皇后	悲恋帝	今上	春宮		
	7	5	8	6	11	14	22	4	16	18	27	28	10	17	30	13	1	19	20	24	3	12	15	21	25	26	29		
一				36	(19以上)	閑白姫君		(18以上)					17			(17前後)	15					(18前後)		(16以下)					
二		崩御	中宮	37	春宮	尚侍		二宮					18女三宮			卿兵部	16					權中納言	兼左大將に降嫁						
三	讓位	△		38	即位	入内							19			春宮	17御東息所宮	18											
四		△	皇后	39		立后				(これ以後誕生)			20					1(誕生)	2						1(誕生)				
五														2	3										2				
六														3	4										3				
七														4	5										4				
八									1(誕生)	1(誕生)					5										1(誕生)	2			

[illegible]

人物 物語年		水尾院	皇太后宮	水尾女院	閑白	嵯峨院	嵯峨女院	女帝	式部卿宮	右大臣	麗景殿女御	女一宮	忍草姫君	入道宮	後涼殿中宮	初草姫君	我身院	我身姫	三条院	皇太后	女二宮	閑白	女四宮	左大臣	藤原皇后	悲恋帝	今上	春宮	
		7	5	8	6	11	14	22	4	16	18	27	28	10	17	30	13	1	19	19	20	24	12	15	21	24	5	4	
三十四	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
三十三	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
三十三	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
三十三	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
三十三	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
三十三	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
三十三	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
三十三	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
三十三	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
三十三	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
三十三	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
三十三	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
三十三	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
三十三	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
三十三	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
三十三	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
三十三	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
三十三	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
三十三	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
三十三	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
三十三	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
三十三	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
三十三	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
三十三	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
三十三	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
三十三	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
三十三	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
三十三	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
三十三	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
三十三	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
三十三	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
三十三	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
三十三	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
三十三	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
三十三	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
三十三	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
三十三	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
三十三	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
三十三	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
三十三	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
三十三	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
三十三	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
三十三	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
三十三	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
三十三	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
三十三	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
三十三	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
三十三	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
三十三	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
三十三	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
三十三	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
三十三	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
三十三	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
三十三	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
三十三	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
三十三	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
三十三	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
三十三	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
三十三	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
三十三	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
三十三	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
三十三	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
三十三	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
三十三	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△		

[illegible]

人物 物語年	水尾院	皇太后宮	水尾女院	閑白	嵯峨院	嵯峨女院	女帝	式部卿宮	右大臣	麗景殿女御	女一宮	忍草姫君	入道宮	後涼殿中宮	初草姫君	我身院	我身姫	三条院	皇太后	女二宮	閑白	女四宮	左大臣	藤壺皇后	悲恋帝	今上	春宮	
	7	5	8	6	11	14	22	4	16	18	27	28	10	17	30	13	1	19	20	24	3	12	15	21	25	26	29	
四十五	△	△	△	△	△	△	△	△	38	(41以下)	22	14 中既に 宮に	61	42	11 参り 東宮	△	△	△	△	△	(35以下)	△	(60以下)	39	42	△	22	12